会報

第 27 号（令和３年７月３１日発行）

北海道高等学校世界史研究会

事務局　北海道札幌北陵高等学校
〒 002－0857
札幌市北区屯田７条８丁目５－１
TEL(011)772－3051 / FAX(011)772－3052

高世研第 51 回大会を終えて

北海道高等学校世界史研究会
会　長　　橋　本　達　也
（北海道科学大学高等学校長）

暑中お見舞い申し上げます。

会員そして全道の高校で地歴公民科教育に携わっているすべての先生方の益々のご活躍を祈念いたします。昨年はコロナウイルス感染によってあらゆる生活場面が翻弄されましたが、歴史教育に携わる者として、この事態をいかに受け止め、今後の歴史教育にいかに生かさねばならないかについても考えさせられる日々であったと思います。

こうした事態の中、学校の諸行事や各種大会が中止を余儀なくされましたが、５１回を迎える本研究会の大会をオンラインで開催することができました。協力頂いた講師の皆様、全国から参加頂いた皆様に、心から感謝を申し上げると同時に、思い切って開催して良かったと受け止めております。

大会は、「生徒とともに語る世界史へ」という全体テーマのもと、第１部では、昨年、岩波書店から出版された『〈世界史〉をいかに語るか　グローバル時代の歴史像』において鼎談をされた長谷川貴彦（北海道大学教授）・成田龍一（日本女子大教授）・小川幸司（長野県立高校校長）の三氏から提言をいただき、司会や参加者からの質問を交えながら議論を深めました。冒頭の長谷川教授による「疫病の時代を生きる」という基調講演では、2020 年に発表された米・英・イスラエルからの４本の著作に言及しながら、「コロナによるグローバル危機は歴史の分水嶺を形成しており、全体主義的な監視社会か市民社会の権力強化か、ナショナリズムによる孤立かグローバルな連帯かという究極的な二つの方向の間での選択を迫っている」というユヴァル・ノア・ハラリの指摘が紹介されました。成田教授からは、「ビッグヒストリーの視点や社会史研究の知見を加味することによって、〈いま〉の事態をよりよく説明することが出来る可能性」が指摘され、歴史総合の柱である「近代化・大衆化・グローバル化」という観点から感染症を歴史的に認識できることが理解できました。小川校長からは、「大きなスケールの歴史叙述になればなるほど読み手はただの消費者となり、歴史と自己が離れる逆説が起こる」という、高校教育現場に携わればこその重要な視点のもと、「生徒の腑に落ちる学び」の実現のために、「『歴史の主体』と『歴史を語る主体化』の双方に再検討を行う必要性があり、『対話する歴史学・歴史教育』を通じてこそ、生徒が価値の根拠を多角的に問い直すことが可能となる」ことが指摘されました。オンラインにより多くの方が議論に参加し、通常の大会を上回る充実した時間となりましたが、我々の予想と異なり、道外からの参加者が道内を上回るという、喜ぶべきか、反省すべきか微妙な現実もありました。

今後の社会状況が未だに見通せない中、次回大会のあり方についても検討を始めています。形がどのように変化しようとも、「研究し、学び合う」という基本スタンスは変わることはないと思います。新指導要領のスタートは、いよいよ来年となりました。担当科目の垣根を越えて、生徒達によりよい学びを実現するため、今後も協力関係を深めましょう。是非とも、仲間に入ってください！

第 51 回研究大会記録

「生徒とともに語る世界史へ」

日　時　　令和２年８月 22 日㈯
会　場　　オンライン開催（Zoom 利用）

①パネルディスカッション
　テーマ　　「『〈世界史〉をいかに語るか』その後 ―世界パンデミックの現状をどう将来の教科書に記述するか―」
　基調報告　「疾病の時代を生きる」　長谷川　貴　彦　氏（北海道大学教授）
　パネリスト　成　田　龍　一　氏（日本女子大学教授）
　　小　川　幸　司　氏（長野県立蘇南高等学校長）
　司　　会　　吉　嶺　茂　樹　氏（北海道有朋高等学校教諭）

②研究討議　　「歴史研究の成果を日々の授業にどう活かすか」
　進　　行　　本　間　靖　章　氏（北海道札幌北陵高等学校教諭）

パネルディスカッション

【基調報告】

「疾病の時代を生きる」

北海道大学教授
長谷川　貴　彦

〈報告要旨〉

Covid-19 のパンデミックに直面した現在、歴史学は何を語るのか。
人類はペスト・コレラ・スペイン風邪と幾度も感染症の大流行にさらされてきた。これらの感染症の経験は歴史によって人々に記憶され、人類と共存関係にある。眼下のパンデミックに対し、社会学、社 会史、政治思想、人類史、それぞれの視点から描かれた論考を頼りに、「コロナの時代をいかに生きる か」を考察し、コロナの時代に対して一つの提言を試みる。

【コメント】

「新型コロナウイルス禍のなかで」

日本女子大学教授
成　田　龍　一

0. ポスト・コロナとウイズ・コロナ

・さまざまな感染症の語り方――①その背後にある歴史認識――人類とウイル スとの共存の歴史のなかのひとこま：ビッグ・ヒストリーとして、目の前で行わ れている新型コロナウイルスとの確執は、長い人類とウイルスとの関係のひと つの局面という認識。

J・ダイアモンド『銃・病原菌・鉄』（1997 年 /2000 年）――「家畜がくれた死の贈り物」。家畜 (農業と牧畜) と集住・開発

山本太郎『文明と感染症』（2011 年）――ウイルスと人類の対抗的な共存

・それに先行して、社会史研究が感染症に着目し、社会の再編成との関係を探っ た。ビッグ・ヒストリーの視点とともに、社会史研究の知見を加味することで、< いま > の事態をよりよく説明することができる。②「歴史総合」を補助線とし て、社会史研究の議論を紹介したい。

1. 社会史研究と感染症――「歴史総合」を補助線として

三つのフェーズと三つの感染症（「近代化」とコレラ、「大衆化」とインフルエン ザ、「グローバル化」とコロナ（新興感染症））

・【近代化】：コレラと公衆衛生――⓪ 19 世紀におけるコレラの世界化、各地でのパンデミック、①急性感染症に対する疫学的な有効性―「西洋知」の優位と公衆衛生、②外部からの強制としての公衆衛生

――帝国主義の知としての公衆衛生 (1894 年の中国におけるペスト)

――慢性感染症 (結核) による衛生の内面化

・【大衆化】：インフルエンザと衛生への動員――⓪第一次世界大戦にともなうインフルエンザの大流行 (ウイルス)、①内務省 (衛生局) によるポスターなどによる注意喚起―情報化、②衛生意識の動員、③国際的な取り組み―国際連盟保健 機構 (1921 年)

――ハンセン病への差別の強まりと連動しての「清潔なファシズム」

・【グローバル化】：新興感染症の登場――⓪開発と移動の拡大による新興感染症の登場（HIV SARS MERS COVID―19)、①天然痘撲滅宣言と慢性疾患症の時代が霞んでしまう、②衛生意識の定着ゆえの恐怖

2. 身体論―身体の社会史から、再び社会論へ

・「新しい日常」「新しい生活様式」の感染史的意味――目の前の変化の社会史的解釈。近代 / 現代社会の仕組みの露呈

・グローバル化にともなう社会のかたちの浮上――人と人との距離の保持、対面接触への忌避、技術を介した人間関係

・忘却との抗争――変化した制度だけが残ることへの対抗――歴史的思考力

【コメント】

COVID-19 の衝撃と「革命的チャンス」～歴史教育の可能性を考える

長野県蘇南高等学校長
小　川　幸　司

1『世界史をいかに語るか』における論点より

⑴　グローバル・ヒストリーのように**「大きなスケールの歴史叙述」**になればなるほどに、読み手はただの消費者となり、**「歴史と自己が離れる」**逆説がおこる。

☞グローバリゼーションの時代の**グローバル・ヒストリー特有の課題**だろう。

・以前の世界史における「大きなスケールの歴史叙述」
　日欧の比較史のなかで**日本社会の後進性**について考える
　世界資本主義体制・帝国主義の歴史のなかで**日本の他者支配**について考える

・たとえば、ポメランツ『大分岐』からは**世界の各地域のポテンシャル**を学ぶ
　各地域の多様な歴史展開の特性と可能性への丁寧なまなざし
　各地域が相互に緊密に結びついていく歴史への丁寧なまなざし

☞**グローバリゼーションが所与の前提**で、**関心がその中での成功の模索になりがち**

・歴史叙述を学んだあと、「ではどう生きるか」となったとき、テーマが「個人の心構え」になりがち

⑵　**「身体化された自己」**という視座からの**「下からのグローバル・ヒストリー」**の可能性

☞脳の意識、心理・情動などの内面への着目（リン・ハント）

☞国境管理とパスポート、人種概念の構築性と世界史的展開（貴堂嘉之）

⑶　**「歴史の主体」と「歴史を語る主体」の双方に再検討（「転回」）を行う**必要性

☞主体そのものの再検討 :subject（独立した思考主体）だけでなく、**agency（相互依存的な主体）のありよう**への着目

・「歴史を語る主体」のありようによって、叙述される「歴史の主体」の姿は変化する ＝ **複数の世界史**（良知力）

☞歴史の**「趨勢」と「主体」との関係**を多くの歴史家が論じてきた

・「趨勢」を加速させる「主体」への着目（または「趨勢」に抗う「主体」への着目）（E.H. カー、遅塚忠躬）

⑷　歴史教育の課題

☞入れ子短冊型通史を参照しながらも、**星雲状のモンタージュ（自己・地域・国家・圏域・世界）**を随所に配置してその**星座構造（布置）**をみること ＝ **新科目「歴史総合」、課題探究としての歴史**

☞**歴史を構築する学び**への転回 ＝「歴史を語る主体」として学ぶ

☞**根拠の模索 :**「民主主義」も「人権」も「いのち」も思考の根拠（普遍的価値）になりにくい時代

2 COVID-19 の時代における「主体」とは

⑴　国家と個人の関係

☞生活維持（アクセル）と生活制限（ブレーキ）を同時にかける**矛盾した政治**への戸惑い

☞生存を保障するために**「いのち」に無限定に介入する政治**（「生政治」）への従属

☞**生活格差の是正を放棄する政治**への失望

＝【歴史の主体として】agency の分裂、新自由主義国家の管理機能の強化、福祉国家の平等化機能の放棄～**なすすべがない主体、自主的なつながりを模索する主体**

＝【歴史を書く主体として】思考停止と専門家見解への依存、民主主義・人権・いのちの尊重の動揺～**語れない主体、問い直す主体**

⑵　学校における教師の姿

☞激変する状況の中で、山のように降りそそぐ文科省と都道府県教委の見解への依存
　～なすすべがない主体、語れない主体

☞価値の根拠を多角的に問い直す必要性 **～問い直す主体**

「いのち」を守るとは：接触を減らして感染リスクを減らせば済むのではなく、かけがえのない**今このときの「いのち」の質を守る**という視点があったほうがよい。また、**自国民の「いのち」と他国民の「いのち」が循環的に支え合っている**という視点があった方がよい。
参照：ホロコーストをいきのびた人々（フランクル『夜と霧』）

「民主主義」を守るとは：例外状態の主権者の決断（シュミット）は「未知の壁」を前にして**「対話」的な「集合知」**であるべき。「対話」とは会議の多数決ではなく、多層的・動態的であったほうがよい。
参照：フランス革命における人権宣言と恐怖政治、アルザスの歴史

「人権」を守るとは：危機の時代ほど、人権は平和的に守られねばならない。「平和」とは**権力による上からの平和（pax）**ではなく、**人々の日常的なやさしさの集積としての平和（shalom）**であったほうがよい。（岡田渥美）
参照：ローマの平和、G. オーウェル『カタロニア讃歌』

☞ビッグ・ヒストリーのなかで**ウイルスと人間の「共生と疾病」の展開**を問い直す必要性
～問い直す主体

「コロナの時代」とは：一時的な例外状態なのではなく、**繰り返される日常**になる可能性を視野の中においておいたほうがよい。

感染症の記憶の意義とは：これまで歴史の記憶のなかで**感染症を忘却してきたことがどのような問題を現在にもたらしているか**を考えた方がよい。

⑶**「対話する」歴史学・歴史教育へ**

☞保苅 実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』の相手を無視せず「対話する」歴史実践

☞バフチン『ドストエフスキーの詩学』の対話論

・それぞれの人生は、ひとつのストーリーのなかで叙述できず、ストーリーは並行する人生どうしの「対話」（ポリフォニー）の形をとらざるをえない。

・「対話」における発話は相手の応答によって意義づけられる。よって「対話」はほんらい完結不可能なもの。

☞グローバリゼーションの激流のなかで、**自らの意思ではどうにもならない歴史を体感**しながらも、**「いのち」「民主主義」「人権」を生活のなかで問い直し**、その問い直しを**政治・経済・社会のあり方をめぐる「対話」**としての歴史教育につなげていく。

・「歴史を語る主体」は、かけがえのない現在を起点に、未来を展望するために、過去を探究する。その主体性は、人類的危機の今だからこそ発動できるはず。

・ベンヤミン『歴史の概念について』「一定の星座的布置がさまざまな緊張をはらんで飽和状態にいたっているときに、思考作用が急に停止する と、その布置は衝撃を受け、モナドとして結晶することになる。(...) このようにして成立する構造体のう ちに史的唯物論者は、ものごとの生起がメシア的に停止するしるしを見てとる。言い換えるなら、抑圧され た過去を解き放つための戦いにおける、革命的チャンスのしるしを見てとる。」

☞私の実践として

・**動態的な「対話」**を重ねるなかでオンライン教育を構築
　～拡大主任会・ワーキンググループ・分掌会議・職員会
　～「国や県を頼らないで**まずは自分たちでブリコラージュする**」

・**「今だからこそできる学び」**に校長主催「ブリコラージュ賞」

・**「100 を 0 にしない」方針**
　～過去を振り返り本質を残す！

・**生徒との「対話」**を校長ブログ（蘇南高校 HP）として集合記憶へ
　～生徒の生き方から私が学ぶ

【参考文献】
G. アガンベン、J-L. ナンシーほか『現代思想 vol48-7 < 緊急特集 > 感染 / パンデミック』（青土社、2020 年 5 月号）
飯島 渉『感染症の歴史』（清水書院、2018 年）
岡田渥美『人間にとって「教養」とは』文理閣、2020 年）
M. デイヴィス、マニュエル・ヤン訳「疫病の年に」（『世界』岩波書店、2020 年 5 月号）
成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか』（筑摩書房《学芸文庫》、2010 年）
長谷川貴彦『現代歴史学への展望』（岩波書店、2016 年）
M. バフチン、望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』（筑摩書房《学芸文庫》、1995 年）
W. ベンヤミン、鹿島 徹訳注『新訳・評注 歴史の概念について』（未来社、2015 年）
山本太郎「パンデミック後の未来を選択する」（『世界』岩波書店、2020 年 7 月号）
小川幸司ほか「臨時休業中の生徒の成長をグランドデザインの見直しにつなげる」（『VIEW21』ベネッセ教育総合研究所、2020 年 8 月号）

参　加　記

世界史研究会参加記

北海道有朋高等学校　（遠隔教育担当）
町　田　　哲

今回、初のオンライン開催（Zoom による）という形で開催された北海道高等学校世界史研究会第 51 回研究大会に参加させていただいた。今年度から北海道有朋高等学校に赴任し、研究会の運営に長く携わっている吉嶺茂樹先生と同僚となった。先生には、日頃から様々な書籍や論文、研究会やホームページなどを紹介していただいており、今回の研究会への参加も吉嶺先生からの紹介によるものであった。もともと日本史を専門としていることもあり、世界史の研究会には初めて参加させていただいたため、パネルディスカッションや研究討議の質疑応答での議論にはついていけたかどうか甚だ疑問ではあるが、今回の研究会に参加しての感想と、今後の教員としての展望を、拙いながらも述べさせていただく。

今回の研究会は、パネルディスカッションと研究討議の二本立てとなっており、パネルディスカッションでは長谷川貴彦氏（北海道大学教授）による基調報告の後、パネリストの成田龍一氏（日本女子大学教授）と小川幸司氏（長野県立蘇南高等学校校長）による講演が行われた。現在、われわれは Covid-19（新型コロナウイルス）によるパンデミックに直面しており、そんな中で歴史学の立場や歴史教育の立場からは何ができるのか、を提言していただいた。

また、研究討議では、北海道内の高校のみならず、福島や愛知、東京、兵庫や沖縄まで、さまざまな地域の先生からの提言や実践紹介があり、活発な議論が行われた。特に、九州の教員志望の大学生からも質問・意見があがり、私も若い方の意欲的な発言に身が引き締まる思いであった。日々、さまざまな業務に追われながらも、今回のような研究会に参加し、学び、「知」を獲得している私たちが、まずは率先して「対話」を行い、「知」を広げていく。できることは少しずつかもしれないが、そのような学びと対話の積み重ねが、ひいては目の前の生徒の学びや知の獲得にも繋がっていき、世の中を変えることにも繋がっていくのではないか。若い方の意見に触れ、あらためてこの職業の重要な役割に気づかせてもらったと感じている。

さて、今回の研究会に参加しての感想を述べさせていただく。まずは私自身、大学・大学院時代は日本史の近現代史を専攻していたので、当時、ゼミ発表の準備の際に論文や著作を読ませていただいた成田龍一氏のお話を聴けたのはとても感慨深かった。歴史を授業で教える際にはどうしても政治や戦乱が中心になってしまい、病気や感染症についての出来事は文化やエピソード的な位置づけになってしまうという事実、そし

て、オフィシャルな記憶からは抜け落ち、変化した制度のみが残る、との成田氏の指摘は非常に的を射ており、今後の歴史教育における大きな課題であろう。東日本大震災の後にも、史料から読み取れる過去の災害や、周期的に起こる三陸沖地震に注目が集まったが、あくまで教科書などでもコラムなどで触れられる程度であるのが現状である。歴史教育の重要な役割である「過去の教訓を現在や未来に生かす」という観点からも、感染症や災害などの歴史的事実をどのように伝え、生かしていくかをわれわれは考えていく必要がある。そして、これから実施される「歴史総合」や「世界史探究」「日本史探究」での実践では、この点を充実させていくことが一つの大きな課題であると考えている。

また、もう一つ個人的な話ではあるが、小川幸司氏の実践例をまとめた著書は、私も前任校で世界史の授業を担当する際に大いに参考にさせていただいた。私は、大学進学した際に、高校の「歴史」の授業と、大学での「歴史学」とのギャップ、「教科としての歴史」と「学問としての歴史」とのギャップに非常に苦しんだ経験があった。教員になる際に目指したことの一つに、「歴史」と「歴史学」、その両方を経験している自分ならではの、両者の橋渡しをするような授業を目指したい、という思いがあった。小川氏の実践例はまさに自分がやろうとしていることの完成版ともいえる内容となっており、そのことに大きな感銘を受けた。また、今回の小川氏の報告の中で紹介されていた、長野県蘇南高等学校の取組を拝見させていただいた。校長である小川氏のブログの文面からは、学校でのコロナ対応、行事の様子、そして生徒の元気で活発な様子がひしひしと伝わってきた。コロナ禍においても、小川氏の学校では学びを止めることなく、むしろ、「今だからこそできる学び」を小川氏自らが主催する「ブリコラージュ賞」という形で活性化させていた。私事ではあるが、現在の勤務校では地方の小規模校に向けた遠隔授業を担当することになっている。地方の学校では、さまざまな制約から、やれることが限られている場合が多いが、小川氏が自ら率先して呼びかけていたように、「今だからこそできる学び」を実践し、「その学校だからこそできる学び」、「遠隔授業だからこそできる学び」を目指して授業実践に取り組んでいこうと決意を新たにさせていただいた。

最後に、勝手ながら私自身の今後の展望と決意表明をさせていただいて、この文章を終わらせていただく。今回、長谷川氏、成田氏、小川氏の発表・報告を聴き、あらためて今回の新型コロナウイルスの事態の大きさ、歴史上における意義の大きさについて再認識した。それと同時に、歴史を教えるということは、過去のさまざまな事象を扱うと同時に、現在私たちが体験している事象、そしてこれ以降の未来に起こる事象に関しても、いずれは教えるのだ、ということにもあらためて気づかされた。過去の事象が史料をもとに語られるように、現在、そして未来の事象に関しては私たちが語る主体になって、よりリアルにこれからへと伝える必要がある。新しい学習指導要領でも、現代の諸課題を主体的に解決する力、社会のあり方や人間としての生き方について選択・判断する力などが重要視されており、過去の歴史的な事象や教訓を今後に生かすような取組は、ますます重要視されていくだろう。そのような力を持った生徒を育てていくためにも、日々、さまざまなことにアンテナを張り、過去と現在、そして未来との繋がりを意識した授業実践を続けていきたい。

参加記

私立札幌光星高等学校教諭
米　田　知　己

はじめにお断りしておきますが、私は今まで世界史を教えたことがないだけではなく、史学部卒でもありません。社会科学出身の、主に日本史を舞台とする若手？教員がこのように考えているという目線でお読みいただければ幸いです。

今回の研究会では、『＜世界史＞をいかに語るか』で冒頭の鼎談に参加した小川幸司・成田龍一・長谷川貴彦各氏をお招きして、COVID-19 の中に生きる我々と歴史の関係について報告、ディスカッションととも

に、いかに教育に還元していくかについて議論が行われた。

この研究会の前に、前述の鼎談の内容について勉強会が開かれた。私が報告を担当したこの勉強会では、グローバル・ヒストリーにまず焦点が当たった。現在歴史学の主流となった、文化史には文化決定論に陥ってしまっている点と、対象の断片化という課題を指摘することができ、グローバル・ヒストリーのような「大きな物語」が復権している。このグローバル・ヒストリーは、統一された定義が必ずしもあるわけではないが、時間・空間を広げ、戦争や政治・文化などの広範な事象を扱い、疾病・環境など新しいテーマを扱う点がすべてにおいて共通していると言える。まさに、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』やジャレド・ダイアモンドの『銃・病原菌・鉄』などを想定してもらえればよいだろう。

グローバル・ヒストリーは過去にも存在したが、現在台頭してきているのは「言語論的転回」の影響を受けたものである。この「言語論的転回」がどのような意味なのか、なかなか理解できなかったことが報告での最初の話題となった。「言語論的転回」は哲学・論理学から発生し、諸学問に繋がっていったものであり、人々の「意識」から「言語」へと分析の土台を転換しようとするものである。表示される言語によって、我々の感覚や意識は規定されるものであるとでもいうべきか。同じはずの虹を構成する色が各国で異なっているように。

「言語論的転回」を受けたことによって、歴史ではその叙述や語りに注目が集まる。歴史の当事者もまたそれを解釈する人のどちらにも「主体」が存在し、その人自らの意識などに規定される側面が浮かび上がってくる。歴史教育にこの考えを流し込んでいくと、史資料などを活用していくことで、この「主体」が浮かび上がり、様々な立場から歴史を見、自らの中で統合していくことることができるようになり、また生徒自身も他者との対話との中で、より歴史と自らを見つめなおすことができるようになる。また、鼎談では小川の『世界史との対話―70時間の歴史批評』が取り上げられていた。「事実関係」の提示、「解釈」、「批評」の３つの層からなる世界史叙述の方法は、この先の「歴史総合」を考える上でも大いに参考になるのではないかと感じた。

鼎談の３つ目のポイントは世界史のなかの「世界史」であった。普段日本史を担当している中で、私は世界史の中の日本史を大切にし、閉ざされた一国史にならないように心掛けているが、世界史のなかの「世界史」とは一体何を意味するのか、疑問を持ちながら鼎談を読んだ。ここでは、通史の形が最初に俎上に上がっている。通史がなければ、個別性を共通性へと転化させられない一方で、通史に固執してしまうと、個別性の統制に終始してしまったり、通史そのものを網羅的にとらえていくだけの歴史になってしまったりする危険性をはらんでいることが読み取れる。また、グローバル・ヒストリーでは、ナショナルなものも問い直され、相対化することが起きる。この点から、グローバル・ヒストリーに至るまでの国家を対象とした歴史学の動向も捉える必要を感じた。北海道札幌北陵高等学校の本間靖章先生によって、ナショナル＝ヒストリーをめぐる研究史の動向が整理された。「国民国家」が人為的につくられたものであり、それを暴くまたは国民が受動的につくられたものであるという点から出発する時期から、国民からの目線に着目する時期、「国民」や「国民国家」そのものを疑う時期と研究が移り変わってきていることが報告された。

研究会そのものについては、長谷川貴彦先生の報告では、「疫病の時代を生きる」という題で、これまでのこの状況にどう識者がレスポンスしたのかが報告された。成田龍一先生の報告では、感染症と社会の変容について説明がなされた。感染症が社会を再編成していき、近代化や大衆化は感染症が引き起こしたとも考えられるとの指摘があった。小川幸司先生からは、鼎談の内容とコロナ感染症の広がる現在との結びつきについて報告があった。

事前の勉強会で話された内容をもとに研究会の内容を、自分なりに振り返ってみたい。はじめに勉強会で焦点のあたった「言語論的転回」については、長谷川氏による報告でより深めることができたと感じる。この先、このコロナ感染症が歴史の教科書に記載され

たときに、下からの目線で歴史を見る手掛かりになるだけではなく、我々がどのような意識を持っていたのかが、表示された言語やそれに対する応答からありありと浮かび上がってくるのではないだろうか。「主体」をめぐる議論については、小川氏による報告でより示された。歴史の「主体」には、「subject としての主体」と「agency としての主体」があり、歴史教育の場で求められているのは「agency としての主体」であるとしていた。agency として歴史を見つめることで、相互主体的になるともしていた。この「agency としての主体」は「OECD　ラーニング・コンパス 2030」で中心的な概念と位置付けられている生徒エージェンシーにつながる側面があるのではないか。このコロナ禍でこの主体が、模索する主体と能動的になる主体に分裂してしまっていると小川氏は指摘する。その上で、分裂が起こっているからこそ、問い直す主体が登場すると位置付けている。これまでの価値観が大きく揺らいでいる今が、自らを問い直すきっかけであるという点には深く共感するが、現状の力量ではまだまだ実現できているとは言い難い、自らの現状に悔しさとさらなる精進の必要性を大きく感じた。「歴史総合」につながる点では、成田氏の報告の中に大きな気づきがあった。近代化や大衆化は「歴史総合」において、大項目を形成している概念である。同時に成田氏は、感染症が社会を再編成する姿をより明確に見るためには、社会史研究を加える必要があると指摘した。感染症以外にも様々な見方がおそらく歴史には存在するであろうし、歴史研究だけにとらわれない、幅広い見地を我々が養う必要性を痛感した。「歴史とはかくあるべし」というような固定観念を捨てなければならないであろう。

日本史担当教員としては、世界史のもつ幅広さに圧倒される瞬間であった。普段から、アジアとのつながりや世界の中での日本を大切にしながら、授業などを行っていたが、一国史の枠からはみ出すことは少なかったように思える。世界史の中の世界史が問われている中で、日本史をどのように位置づけていけばよいのか、今までには意識しなかった面から考えるきっかけにもなった。また、史学の動向にもより気を配らなければならないとも感じた。「歴史総合」では、最初の大項目で、歴史を学ぶ意義や学び方を学習する。我々が「歴史は暗記するもの（もうそのようなことを考えておられる人はいないでしょうが。）」というような考え方だけではなく、政治や外交、経済のような国家レベルの歴史だけではなく、地域レベルや市民レベルなどの様々な歴史があることを踏まえ、学んでいかなければならないであろう。その反面、特に史学科卒ではない教員に対するサポートもより充実させる必要がある。教員間の対話もまた、新たな気づきをもたらすものであるはずだ。

最後になりますが、事前勉強会の報告の大役を任せていただいた、北海道有朋高校の吉嶺茂樹先生、事前勉強会の司会ととても貴重な補足報告をしていただいた、北海道札幌北陵高校の本間靖章先生の各氏に感謝申し上げます。

第 52 回研究大会のご案内

日　　時　令和２年８月６日㈮　13:00 ～

会　　場　オンライン開催

講　　師　島　田　竜　登　氏（東京大学准教授）

過去の研究大会講演題目	
回（年）	講演題目・講師
46(H27)	・「『歴史と記憶』をめぐる諸問題—資質・能力の育成と歴史学習—」 国立教育政策研究所教育課程研究センター　教育課程調査官　村　瀬　正　幸　氏 ・「『他者』、そして『自己』の理解のために—日本史を世界において考える」 跡見学園女子大学文学部特任教授　三　谷　　博　氏
47(H28)	・「アジアの開発とグローバル・エコノミーの展開：GIS を用いて」 東京大学大学院人文社会系研究科教授　水　島　　司　氏 ・「これからの世界史教育を展望する」 長野県長野高等学校教頭　小　川　幸　司　氏
48(H29)	・「イスラーム世界と日本——イブラヒムの活動から考える」 東京外国語大学教授　小　松　久　男　氏 ・「実施可能な歴史総合カリキュラムの検討」 東京大学名誉教授（高大連携歴史教育研究会会長）　油　井　大三郎　氏
49(H30)	・「資本論 150 年：古典派経済学およびマルクスの視座、そして現代経済（学）の混迷」 名古屋商科大学教授　吉　井　　哲　氏 ・「人種関係史から見る現代アメリカ——奴隷解放後に人種隔離社会が、公民権運動後にトランプ政権が出現したのは、なぜか——」 北海学園大学人文学部教授　大　森　一　輝　氏
50(R1)	・「ボーダースタディーズからみたヒストリーと歴史教育」 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授　岩　下　明　裕　氏

◆編集後記◆

会報第 27 号をお届け致します。発行が大幅に遅れてしまい申し訳ございません。今号は、新型コロナ禍の下オンラインで行われた第 51 回大会の内容を収めました。いつもの大会と異なりパネルディスカッションが中心のため、基調報告の要旨とパネリストのコメントのレジュメ、それから参加された先生による参加記を掲載しました。次号もまたよろしくお願いします。（札幌東高等学校・千田周二）